



Global Awareness I : Exploring Culture and Society

外国人教員による特別プログラム

Group 1



実施日: 2021年10月13日, 10月27日, 11月10日, 11月24日

実施方法: Zoomオンライン

リーダー: 情報学部情報学科1年 北村 梢生 / 医学部医学科1年 玉置 諄

講師: 大学教育・学生支援機構大学教育センター Raymond Hoogenboom先生

大学教育・学生支援機構大学教育センター Anna Husson Isozaki先生

目的

個人またはグループ単位で、与えられたテーマごとに Pechakucha 形式で英語でのプレゼンテーションを行う。各々の趣味や興味を知り、あるいは国際問題についての理解を深めながら英語でのプレゼンテーション能力と自然なコミュニケーション能力の向上を目指す。

Pechakucha とは

プレゼンテーションを英語で行うが、主に2つの点で従来の方法と異なる。

- ①各スライドには自動送り（今回は20秒）を設定し、自動的に次のスライドに進む。
- ②スライドを文字で埋めたり原稿を用意したりせず、画像に合わせて、その場で話す内容を考えながら発表をする。完璧な文法は要求されず、自然なコミュニケーションを目指す。



第1回

Pechakucha の概要と初回のテーマが説明された。テーマは「自分の趣味や興味」で、Anna Husson Isozaki 先生による Pechakucha のデモンストレーション（図2）があった。その後テーマに基づいて各々が発表への準備をした。

第2回

練習では収まっていた分量も本番では時間が足りなくなってしまうなど、臨機応変に発表を行わなくてはならない Pechakucha の難しさを痛感した。他のメンバーのことを知り、友人が増えるなど良い時間となった。（図1）

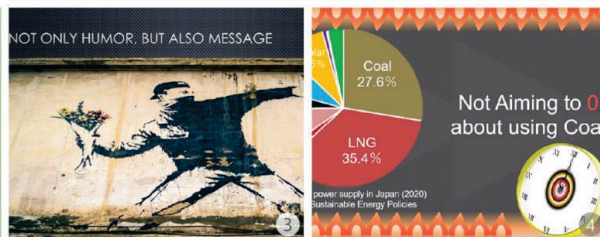


第3回・第4回

自分の選んだテーマごとにグループを作成した。グループワークで Pechakucha を準備・発表し、発表後には英語で質疑応答も行った。メンバーと役割分担をするなど、グループ内で協力して活動した。（図3・図4・図5）



発表会では、どのグループも発表の内容がよく練られていて、新しい分野や国際問題などへの理解を深めることができた。質問も射たものが多く、聞いている間も常に刺激の多い発表会であった。探求心や語学力などの自分に不足している力を見つめなおすこともでき、講師の方のコメントも非常に参考になった。

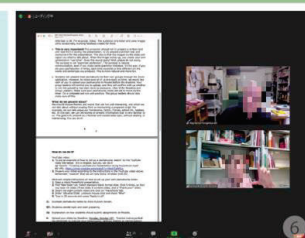


共同で発表を準備する体験は新鮮で、調整や対話など実社会で求められる能力を伸ばすことができた。相手の考え方を聞く貴重な機会ともなった。

学んだこと

- ①英語でのスピーチ、コミュニケーションの能力。
- ②他者との共同作業を行う能力。
- ③GFL 生らの多様性に満ちた嗜好や興味、考え方。

プレゼンテーションとは元来聞き手に向けて訴えかけるものだが、原稿があると事前に決めた通り発表することに集中してしまい、説得力や面白味に欠く「音読」となってしまうことがある。Pechakucha を通して、スライドや原稿に頼りすぎないコミュニケーションとしての大切さを再認識した。（図6: 解説をする講師のお二人）



実践的な Pechakucha を通して、スライドが変わるまでの余った時間を言葉で繋ぐ力が鍛えられた。咄嗟に何かを発言しようとする際に、自然なコミュニケーション能力が養われていくのだろう。新たな視点で削れる情報や話す順番を吟味することは、今回に限らず様々な場面に効果的な練習方法であるように感じた。（左図: 講師のお二人）

コロナ禍により対面の講義や活動が自由に行えず入学後の人間関係は限られていたが、今回の活動を通して多くの人と交流し多様な考え方や嗜好を知ることができた。GFL 生の国際問題等に対する意識の高さを改めて感じ、今後の活動に対する意欲が更に高まった。対面での開催でなくとも、グローバルに活動するための能力を鍛えることが出来た。

プログラムを通して、英語でのスピーチや会話をする能力、共同で作業する能力を身に付けることが出来た。これらの能力は GFL として、日本のみならず海外で活躍するためにはなくてはならないものであり、また活躍するための自信を各々身に付けたと言える。この経験は GFL として将来羽ばたいていくための重要な糧となるであろう。



対面での関りが少なくなっている中、GFL 生達と共同で作業しながら対話を重ねられるよう工夫を凝らして下さった関係者各位へ感謝を申し上げます。